

第 24 回香川県子ども・子育て支援会議 会議記録

- 1 開催日時 令和 5 年 11 月 6 日（月） 13 時 30 分～14 時 45 分
- 2 開催場所 香川県庁 12 階大会議室
- 3 出席委員 榎原委員、小柳委員、白石委員、紫和委員、坪井委員、中橋委員、西岡委員、野崎委員、福本委員、前田委員、渡邊委員
計 11 名
(欠席 入谷委員、折目委員、片岡委員、佐藤委員、白井委員、谷川委員、森山委員、山下委員、吉村委員)
20 名中 11 名が出席し定足数を満たしており、本会議は有効に成立。
- 4 傍聴者 0 名（定員 10 名）
- 5 議事
 - (1) 第 2 期香川県健やか子ども支援計画の変更について
(事務局) 「第 2 期香川県健やか子ども支援計画見直しの変更案」、「パブリック・コメントで提出されたご意見とそれに対する県の考え方」及び「小学生・中学生・高校生からの意見聴取結果」について、資料 1、2、3、4 に基づき説明。
(会長) 資料 4 の「大人になったら結婚して家庭を作りたいと思うか」という設問について、小学生の 62.7%、中高生の 58.5%は肯定的な回答ということであった。資料 2 の 16 ページ上のグラフを見ると、平成 24 年、平成 29 年、令和 4 年と「結婚しても必ずしも子供を持つ必要はない」に対して、「そう思う」という比率が増えていっており、20 歳から 29 歳では 58.8%が「そう思う」、30 歳から 39 歳でも 56.2%が「そう思う」という大きな部分を占めている一方、それと比較すると小・中学生の比率は好ましい数値ではあるのかなと思った。小・中学生の設問には、結婚して子どもを持つ云々という記載があるわけではないが、そういったことに肯定的なイメージがある一方、20 代、30 代ぐらいになると、やはり子どもを持つことなどに非常に抵抗が生まれるような数値が読み取れ、やはり今の時代の流れの中で 20 代、30 代の女性の方々への支援は、とても重要なのかなと思う。そういった意味で、「みんなで子育て」、「夢と仲間を持って、次の世代を担う子どもたちを安心して生んで健やかに育てる」ことに対する、我々の支援のあり方が問われてくるのかなということも思ったところ。
それでは、事務局からの説明について、ご質問やご意見等をいただきたい。
(委員) 「こどもまんなか」ということで、子どもたちの声を聞いていただいたことはありがたい。一方、ウェブアンケートということだったので、学校配布のタブレットで実施したのかもしれないが、県のライフデザイン事業で、高校に行かしていただいたり、あるいは赤ちゃん触れ合い体験で、高松市内の中学校にも行かせていただいている。今回のアンケートは、中学

校1校、高校1校ということで、時間もなかっただろうと思うが、中学校でも公立の中学校でも、校区によって非常に子どもたちの生活環境、意識について、肌で感じるぐらいの差がある。さらに高校によっては、本当に大きな開きがある。例えば、将来結婚したいかどうかみたいなことは、地域によって、あるいは高校によって随分と開きがあり、こうした内容のアンケートを取る時には、意識をして広く取ってほしい。

そういった意味で、私はこの結果を標準だとは思わない。なぜならば、キャリアデザインの授業に行くと、半数以上の子どもたちが結婚したくないと明確に手を挙げるようなクラスもあり、一方で割とポジティブにとらえている高校もある。偏差値でそうなるのか、家庭環境なのか、わからないが、やはり影響ないとは言えないと思っているため、今後ますます「こどもまんなか」で子どもの声を施策に反映していく中で、アンケートの取り方みたいなことも少し意識していただけたらと思う。ウェブで実施するのであれば、同じフォーマットで、高校は県内5~6校、中学校でもそのぐらいの数を取らないと平均的なものが取れないのではないかと思います、これがすべてじゃないだろうなと思いつつ、結果を見たところ。

私のフィールドで申し上げると、データにもあるように、資料2の18ページの「子育てについて困ったときに相談したり支えあう体制について」、「わからない」と答えている人が一番多い。「不十分である」、「どちらかといえば不十分である」を合わせても37%、それを超えて「わからない」と答えている人が40%もいるということで、「子育て県かがわ」として、子育てのサポートが様々とられていても伝わっていないのでは、意味がないと思う。そのためにも、資料2の54ページの「かがわの子育て支援のネットワークづくり」の図表について、子ども食堂は、今かなり地域の繋がりを作ってきている中で、その部分でも、知らない、わからないということがないように、伝えてくれたらいいなと思う。さらには、子育て支援は、もう子どものいる家庭の問題だけではなく、地域全体、高齢者、障害者、色々な支援をしている人にも、こういった子育てのメニューがあることを知っていただきたいということを踏まえて言うと、今、重層的支援体制の整備事業を熱心に取り組まれている中、介護、障害、子ども、困窮自立支援等々、地域で重層的支援の会議を持っている自治体も増えてきているため、そうしたところもネットワークの一環として、組み入れて、ヘルシーな子育て家庭だけではなくて、本当にしんどい子育て家庭にもきちんと情報が届く工夫をしていただけるように、例えば、子ども食堂がこれ見たときに、「うちは関係ないな」と思わないように、図表に組み込んでいただけたらなと思う。

(事務局) アンケート調査については、ご指摘の通り期間も短かったため、幅広くということがなかなかできなかったが、今後も意見をお聞きする際には、できるだけ偏りがないように、幅広く実施するように工夫して参りたい。

資料2のご指摘いただいた点についても、子ども食堂に関して、はっきりとした記載ができていなかったため、修正を検討させていただきたい。

子育てについて、困ったときに相談する、その体制について「わからない」という回答が多かったことについては、県としても課題として認識しているため、周知方法をできるだけ工夫して、わからないという方に子育て支援情報をきちんとお届けできるように、引き続き工夫して参りたい。

(会長) 「こどもまんなか」の部分で、子どもの意見をしっかり聞いていくために、より多様な地

域、家庭環境など、様々なところを配慮して、データを集めていってはどうかという委員の意見については、ぜひお願いしたいと思う。

資料2の54ページの図表について、例えば、地域の連携ということであれば、医療機関や学校で、保護者が困っているケースがあったときに、その学校側のスタッフはこうした、連携の繋がりをどこまで理解して、どう繋いでいけるのか、図表の中の機関が、どれくらい情報共有して全体として取り組もうというような形があるのか、その辺りもいろいろ考えるところがあるのかなと思う。要は、非常に子育てに困るという状況が生まれた、その保護者やお子さんが、誰かに相談したときに、すぐさまそうした連携の中で、支援にたどり着けるのが重要だと思う。

(委員) 資料2をじっくり読ませていただいたが、その中で気になることは、84ページの貧困対策の部分。貧困について考えたときに、貧困と孤立は、セットになっていると言われている。要するに、「助けて」と声を上げられるかどうか。先ほど会長から、20代、30代の女性において深刻な問題があるという話があったが、コロナ禍でも一番自殺率が多かった世代。やはりその人の自己肯定感や他人、社会に対する最低限の信頼がないと「助けて」とは言えない。そのため、いくら経済的援助や色々な拠点をたくさん作っても、親や子どもは、施設に来るというよりは、その施設にいるスタッフに会いに来る。これはネウボラでもよく言われていることである。人との繋がりがあって、初めてそこに来て、色々な悩みや相談を安心してできるため、その方がどのくらい自己肯定感があるのか、もしすごく低下しているのであれば、そこにどうサポートしていけるか。本当に「助けて」とハードルを下げて言えているかどうか、そのあたりの心理的サポートのあり方も、考えなければいけないのかなと思いつつながら読ませていただいた。それに対しての対策はいかがか。

(事務局) 施設や相談する場所があればいいというものではなく、そこへ行くときのどのようなサポートが得られるのか、要は「人」が重要な部分だと我々も認識しているため、今後、子育て支援の拠点になるようなところを「かがわ子育てステーション」という形で見える化し、より気軽に利用していただけるようにしたいと考えているが、その中でも、やはり心理的な面でも、サポートしていけるように、スタッフの研修の機会や、相互交流の機会等を通じて、そういった心理面でのサポートをお願いできるようにと考えている。また、もし心理面でのサポートが難しいということであれば、ネットワークの中でサポートができる機関につなげることができるように、取り組んでいきたいと考えている。

(委員) そこで働くスタッフが元気で、幸福感がなければ、やはりそこに行った親子も幸せにならないといつも感じている。先ほど中学生が希望する職業が香川県にはないという少し悲しい調査結果もあったが、当院に職場体験に来る中学生は、大体3分の1ぐらいが保育士や看護師になりたいという夢を持っている。3日程度の職場体験の中で、中学生から職員に対してインタビューを行い、「やっぱり私、看護師になります」とにこにこして帰っていく学生と、3分の2は「まだ決めてない」という学生もいる。PT、保育士と話をしたり、病児保育、子育て支援拠点等色々な部署を見て、また、お母さんやお父さんと触れ合った体験を通して、「自分もこんな家庭を持ちたい」、「こういう職業がいいのではないか」と見える化をしている。ぜひこういった体験をどんどん作って、色々な連携を広めて、子どもたちに本当に夢があるような、何か具体性を持てるようなものがあればいいなど、私も毎年受け入れ

ながら思っているところ。

(委員) 今回の見直しに反映してくれということではないが、現在の計画は令和 6 年までなので、来年度に 7 年度以降の計画を立てるかと思う。今回の見直しで、大項目を三つに分けたことは、すごくわかりやすいなと思っているが、やはり一番大きな問題は、経済的負担ということで、子育て期のみならず、結婚する前の人たちが、経済的にしんどくて結婚ができないということがある。計画をざっと見たら 8 割方は、乳幼児期の本当に幼い時期の支援で細かく書かれているものの、学齢期から小学校、中学校、あるいは高校までの部分を見ると、支援のメニューがだんだん減ってきているように感じるが、実際にお金がかかるのは、その部分である。給食費などで、色々のご尽力いただいているところではあるが、みんなが希望する進学、進級ができるなど、そういったようなことも次期計画に香川県独自の何かメニューがあればいいなと思いながら、拝見した。

(事務局) ご指摘のとおり、この計画は令和 6 年度までの計画となっているため、令和 7 年度以降の計画については、来年度検討していくこととしている。その中で学齢期における支援、経済的な支援ということになると、必要な財源というものがまずないと、なかなか県単独で行うことは、難しい面もあるかと思うが、予算を伴うものだけではなく、様々な取組みの中でそういった学齢期のお子さんをお持ちの家庭についても、きちんと支援をしていけるような工夫について検討していきたい。

(会長) こども家庭庁などの動向からしても、国の予算自体は、拡充の方向で間違いないかと思うが、ぜひ香川県の子育てがうまくいくような、様々な予算の形をご検討いただきたい。

資料 2 の 63 ページにおいて、「Ⅷ 子ども・子育て支援を担う人材の確保」という項目があるが、なかなか今、学校の教員になりたがらない、保育士資格を持ちながら就業していないなど、難しいところである。この辺りの人材を拡充していくのに、何かいいお知恵はないか。

(委員) 人材の話は、全国的に重要な深刻な事態になっている。当院も看護師は非常に大変であるが、保育士に限って言うと、困ったことはない。いつも親子がたくさん遊びに来てくれるので、その親が保育士資格を持っているが、全然使っていないケースや、当センターの活動を見たり、病児保育を見学して、ちょっとやってみようかなというケース、スタッフからも声掛けを行い、仲間内で合唱してこんなことをしているよと伝えるなど、それで現実、保育士として入ってきてくれている。色々なサークルや拠点の中で、たくさん来ている親子の中に色々な資格を持っているが、いまは使っていないという潜在的な保育士はたくさんいるため、そういうところに声をかけており、当院はそのおかげで保育士には困ったことはない。ぜひそういったことも検討していただきたい。

(委員) この間、役所に電話し、色々電話して最終的にうちに電話がかかってきたケースがあった。内容は、妻と子どもが 39 度の熱が出ているものの、コロナの抗体検査はマイナス、どうしても外せない仕事があり、両親にも頼れない、休みの日に見てくれる病児保育も全部断られ、もう個人に頼らざるを得ないというお父さんからの連絡であった。なぜ、話をしたかということ、子育ての人材確保と言っても、子育て支援のメニュー自体が、平日 9 時から 17 時をスタンダードにしているものの、今の子育て家庭の働き方が非常に多様になってきており、「年末年始に保育してくれるところとかありませんか」、「1 月 1 日からどうしても

働かなきゃいけないので、預かってもらえませんか、そうじゃないと子ども家に置いてくれないといけません」という相談も多く、働き方改革をしながら、働く人のサポートをするという、自分の中でも非常にバランスが悪いなと感じている。全ての施設でそれをしるとは言わないが、本当に困っている人の声を直接聞くと、香川県内に1か所か2か所、持ち回りでも土曜日見ます、日曜日見ますという施設があり、寄せ集めでも担ってもらえるような人材がいると救われる家庭もあるのではないかなと思った次第である。

(会長) 委員から、保育士資格を持たれている方が潜在的にはたくさんいらっしゃる、そういった方々が良い仲間やめぐり合わせの中で、その仕事に魅力を感じる、そこから仕事に就こうという広がりがあり得るというお話であった。やはり保育の世界の方々が、楽しくしっかり仕事ができているということが、大事なかなと思う。また、逆に保育の方々が抱えないといけない課題も多様にあって、例えば、働き方が多様になっていて、元日から働かなきゃいけないなど、そういったことを考えると、日曜当番医のようなイメージで保育の方でも何かそういう仕組みづくりができないかというようなお話であった。運営上のソフトの部分のあり方の見直しという、一つ可能性のある話ではないかと感じた。

(委員) 今はインフルエンザが流行しているため、どうやって受け入れようかと現場は必死であるが、病児保育については、土曜日はどこも実施している。ただ、それぞれ時間がかかなり違う。当院であれば、第1、3、5の土曜日は、8時から17時まで、第2、4の土曜日は12時半までとなっている。へいわこどもクリニックは、土曜日使った子どもは日曜日も受け入れてもらえる。おそらくそういった情報を皆さん知らないと思う。今、病児保育も一律ではなく、地域の文化やニーズを踏まえて、延長を取るところ、取らないところや時間もまちまちである。もっとこういった情報を皆さんに発信してあげれば、そこまで困らないかなと思う。ただ、病児保育も受け入れがオーバーな状態なので、ちょっと厳しい部分もあると思うが、やはり皆さんが苦しんで、本当にすぎるような思いをしないように、ある程度しっかりした情報を提供してあげて欲しいなと思う。

(委員) 日曜日や休日に当番制でどこかの保育園、認定こども園を開けていくことは、考えていくべきことだと思う。月に1回ぐらい当たると職員も厳しいかと思うが、年に1回2回ぐらいであれば、それは社会の中で我々が託された使命の中の重要な一つだと思うため、そこは何とか対応していくような組織でありたいと思う。ただし、なかなか公の園がやりますよと、手を挙げづらいところもあるため、行政が背中を押していただくようなことが必要かなと思っている。

もう一つ、人手不足の面でいうと、保育士よりも家庭で子育てされた経験のあるお母さんが中心になるが、そういう方々はもっと活躍できると思う。しかしながら、何らかの制度の中で事業をやろうとすると、「資格がありますか」という話になり、「いや資格はないです」というと、何かお手伝いしようと思う人も引いてしまうということがよくある。家庭で子育てをされて、お子さんが中学生、高校生、大学生ぐらいになると、そこそこ時間もあるという方がいらっしゃるはず。そういった方々をどうやってこの子育ての中にもう1回登場してもらって、活躍してもらおうかということが必要。私どもの園でも、以前から資格を持っていない4人程度が子育て支援員研修を受講し、子育て支援員の資格をいただき、園の中で何かあったときには、対応することもやっている。研修はすごく人気があり、なかなか定員

を増やすことは難しいだろうが、もっと定員を増やす努力を、また、既存の事業者だけではなく、他の事業者も含めて考えるべきだと思う。一方で、質の問題となると、誰でもいいというわけではないが、バランスも踏まえながら、人が足りないときには、それこそ猫の手というわけではないけれども、助けてくれる人は使いたいと思う。また、そういった制度づくりを国なり県なりでお願いをしたいと思う。

資料2の18ページの「子育てについて困ったときに相談したり支え合え合う体制について」の部分で、「わからない」という回答が40.5%で伝わっていないという話があったが、やはり伝えるのは、県で言うと知事、市町で言うと、市長、町長がもっと強く大きな声で言っていただく、現場レベルという、困ったときに必ず訪れる小児科や内科、我々の幼稚園、認定こども園、保育園とそういった場所に色々と困った時にこうすればいいという資料をどんどん見えるように置いておくということが非常に大事なのかなと思う。

(会長) 例えば、子育てサポーターなど、そういった名前でお手伝いしていただける方を広く募るなど、「みんなで子育て」を体現していく可能性のあるものだと思う。

(委員) 私も子育て支援員研修を受けたかったが、平日実施のため、行けなかった。子どもが大きくなり、どんどん手が離れていく中で、やはり子どもに携わることがしたいとずっと思っているため、またいつか受講したいと思う。

話は変わるが、高校生のキャリアデザインの授業を担当したことがあるが、将来に対してはっきりしたビジョンが見えていない学生、生きているだけでいいという学生、東京に出ていって何かをしたいけども何がしたいかわからない生徒など、学校によって考え方が本当に違う。しかし、県外に出たいという学生が多いので、そういう子どもたちが香川に残って結婚して、子どもを産んで育てたいと思えるような香川にしていってほしいと思う。

(委員) 私も子育ての経験があり、色々とPTAに携わってきているが、PTAは、ボランティアであり、その活動に少しでも収入や所得が発生すると、やりたいと思う人が増えるだろうなということは携わっていくごとに感じているところ。すごく良い意見、考え方、経験をお持ちの方が、何年間かの任期を終えると、やはり離れていってしまうという実情がある。もう少し簡単にハードルが下がり、でもバランスよく子どもに携わる方が増えていけば、子どもたちも安心する。また、親同士の繋がりもきっとそこにあるので、親たちも安心して子育てをしたり、子どもを任せたりする環境が整うのではないかなと思う。個人的な話になるが、ママ友たちと、ものすごく仲良しなので、柔軟に周りのお子さんを預かって、公園に一緒に行ったりするが、自分の周りの環境がすごくいいなと思っている。市町レベル、県レベルでそういった環境ができていくと、子どもたちも色々と自分の身の回りが充実していることによって、将来のビジョンもはっきりしてくるのかなと思う。また、親同士が仲良い、大人同士が仲良いことで、「こんな大人になりたい」であったり、大人と接する機会がたくさんある中での将来のビジョンが色々と描けたらいいと思う。

(委員) 児童委員を兼ねているため、子どもたちへの積極的な支援が求められているが、実は私たちの児童委員の活動の中で、子ども食堂に関わる機会がだんだんと増えてきている。子ども食堂は当初、十分にいきわたっていない貧困家庭の対策という形で民間から始まって、今は社会福祉協議会も関係していると思うが、その中で、児童委員の関わりも深まってきている。私の市でも、4か所、5か所と増えてきており、子ども食堂に関わる民生委員、児童委

員も増えてきている。そんな中で、単なる食育の面だけの子ども食堂ではなく、それ以外に、家庭や学校で何かいたたまれなくなったような子どもたちが、やってきているような子どもたちの居場所づくりという形で今、積極的に取り組んでいる様子である。また、学習支援の場として子ども食堂が発展していくことにも期待を寄せている。私たち民生委員、児童委員としても、少しでも上手く進めていければと考えているため、ご理解いただければありがたい。

(委員) 労働組合として、子どもの支援関係の取組みを様々なところで実施し、連合本部を通じて、本庁にも色々な要望をしているところ。今回の計画の施策体系を見て、素晴らしい内容であり、それぞれ各論を通して充実すれば、色々な効果が出てくると思う。そうした前提に立ったうえで、経済的負担の軽減であれば、色々な手当や割引などの支援が充実していけばもちろんそれにこしたことはないが、抜本的にはやはりそれぞれの収入が上がっていくことが一番。私たちとしては、賃金をアップさせていくという大前提に立って、子育て支援に繋がるということも念頭に置きつつ、引き続き取り組んでいきたい。

「みんなで子育て」というところと言えば、やはり男性の育児休業の数字が今後上がっていかなければ、駄目だと思う。それについては、個人の意識向上ももちろん必要であり、会社のサポートの部分も必要であるため、県のこうした計画を踏まえて、産業界の中でも浸透させていかなければならないと考えている。やはり親が協力し合って、子育てしていく、「三つ子の魂、百まで」と昔よく言われたように、そこまでは何とかお父さんとお母さんで協力していけるような社会を取り戻していけたら、よりこの計画がぐんと前に進んでいくのではないかと思う。

また、この計画の外側になるかもしれないが、この計画では就学前の教育に触れている部分が多いが、やはり小、中、高といったような公教育の充実も欠かせないと思っている。塾通いが必須になるというような教育が本当にいいのかという辺りも念頭に置いて、公教育の取組みも今後必要かと思っている。この計画自体は、もちろんこの方向でどんどん進めていけば、非常に効果が期待できると思っているため、この計画を踏まえて、我々、労働組合の立場からも、支援をしていきたい、何とかこの計画を推進していきたいと考えている。

(委員) 前回の会議でも少しお話したが、我々、企業経営者が取り組むところは資料 2 の 78 ページの「仕事と家庭政策の両立支援」だと理解している。我々は、働く人が減少していくことと、その対応策として働き方改革に取り組むべきだと思っている。先々週、香川労働局の主催の会議の中で、池田知事から、「様々な働き方改革に取り組むことによって、今まで働けなかった人が働けるようになれば、それぞれで人手不足が解消する。これから重点的に取り組まなければならないところにも手が充てられる」という話があった。来年 4 月から医療関係、運輸業、建設業の方々は、労働時間規制がかかるため、その会議は、まずその分野の人手不足を解消しようというところから始まったが、我々の思いとしては、従業員が趣味や子育て、自己啓発などに時間を使いたいと思う中で、働く時間をできるだけ効率化して、そういったことにも取り組めるように、最近流行りの言葉である「well being」を実現することも、経営者として取り組むべき課題の一つだと思っているため、労働組合の皆さんともよくお話ししながら、進めていきたい。

この計画自体は、本当にすごくよくできていて、前回の説明を聞いて、深く感動したとこ

るではあるが、それを実行するためのお金とスタッフが本当にいるのかなと思った。お金はまだいいとしても、スタッフの部分でいうと、いずれ必ず質ということが言われると思うため、十分に手当てできるのかと思うが、足りない部分は何とかみんなの知恵と工夫で頑張っていくしかないのかなと考えている。

(会長)

数日前の NHK のドキュメンタリー番組の中で、離婚されたお母さんが 1 人で子どもを育てている様子が放送されていた。収入はあるが、子どもが幼稚園に通う服も全部、幼稚園を卒園した子たちの服を集めて、ネームも全部、自分で新しくつけて、この曜日はここから食事を集めてきてというお母さんであったが、たくましいなと思った。子育てをすることに本当に腹がすわっている方であれば、金銭的な支援や様々なところでのサポートをしてくれると思うが、一方で今日お話があったように、そこに辿りつかないご家庭の方々も多々いるのではないかというようなことも感じた。そういった中で、やはり人との繋がり、サポートする側の様々な職種の連携などがより充実し、より楽しく良い仕事ができるという環境をいかに作るのかという部分が、「子育て拠点の充実」や「みんなで子育て」の非常に中核的のところになるのかなと思った次第である。

なかなか重たい課題であるが、今後もご意見等をいただいて仕組みづくりにつなげることができればと考えている。

以 上